

Toshi 伝説 記者懇談会レポート



12月9日(水)、神奈川県立音楽堂にて一柳慧芸術総監督就任20周年記念「Toshi 伝説」のオンライン記者懇談会が行われ、一柳のほか、指揮者の鈴木優人さん、三味線奏者の本條秀慈郎さん、ヴァイオリン奏者の成田達輝さんが登壇しました。また一柳と共に本企画の監修を務める沼野雄司はボストンからオンラインで参加しました。

初めに沼野雄司から本企画の趣旨についてご説明しました。

沼野雄司:

神奈川県立音楽堂(県民ホール・音楽堂)芸術参与の沼野雄司です。一柳芸術総監督の芸術方針に則りスタッフが企画立案し現実化する過程でのサポートをしています。

この公演のタイトル「Toshi 伝説」はいわゆる「都市伝説」になぞらえたものです。半世紀以上にわたり音楽シーンを牽引してきた一柳慧(とし)の伝説であると同時に、一柳さんの音楽はいつの時代も東京とニューヨークを主な拠点にした「都市の音楽」であるということ。そして「Toshi」というアルファベットのタイトルは、伝説的存在でありながら若々しく、自由でポップな一柳さんの精神にピッタリと当てはまるものといえます。

本企画では一柳作品と一柳さんに関連する作品を並べていますが、決して大作曲家を寿ぐものではなく、むしろ音楽家も観客も一緒になって一柳作品で遊んでしまおう、という意味も込められています。私自身、本企画の制作の過程を心から楽しんでいきます。

続けて鈴木さん、本條さん、成田さんから公演への意気込みを語っていただきました。

鈴木優人：

2月13日「共鳴空間」で成田さんと東京フィルハーモニー交響楽団のみなさんと一緒に、一柳先生のオーケストラ作品を演奏いたします。

私は日頃から作曲家の創意に直に触れるように演奏したいと心がけていますが、今回、一柳先生と一緒にプロジェクトを進められることは本当にうれしいことです。そして今回の演奏がただの再演ではなく、作品と演奏者の間に新たな交感・交流が生まれることを願っています。

また一柳先生の依頼で新作のファンファーレを作曲することになりました。このコンサートを盛り上げるような作品にしたいと思っています。

以前、神戸で一柳作品と古典作品を織り交ぜたコンサートシリーズをプロデュースしたことがありますが、一柳先生の若々しさ、音楽に対する自由さ、インスパイアリングな姿勢がとても印象に残っています。



本條秀慈郎：

いつも一柳先生から刺激と驚きをいただいています。ケージ、クセナキス、グバイドウーリナ、ノルドグレンなど世界中の作曲家が日本の伝統楽器のために作曲しているのは、一柳先生のご尽力が大きいと思っています。また2020年1月の弦楽四重奏曲全曲演奏会でも時代ごと挑戦を続けてきた一柳先生の姿に感銘を受けました。今回はそれら「音楽の流れ」を「水の流れ」に重ね、一柳作品のほか高橋悠治、ノルドグレン、本條秀太郎などを含むプログラムを練っているところです。

また今回がデビューとなる伝統楽器奏者たちのアンサンブルも一柳作品の演奏経験豊かなメンバーですのでぜひ注目してください。

成田達輝:

県民ホール、音楽堂の2公演に出演します。昨年から、私のライフワークになっていくであろう、自国の音楽を積極的に紹介すること、また歴史上、現代に至るまですべての音楽を網羅するようなプログラムに取り組んできました。コロナ禍でもその思いは変わらず、このような状況下で今回のプロジェクトに参加できることに感謝しています。県民ホールで演奏するヴァイオリン協奏曲が初演されたのは1983年、私が生まれたのは1992年で私の両親もまだ結婚していませんでした…(笑)。私がこれまで培ってきた音楽のすべてを一柳先生の音楽を通してお見せすることができるよう、全力を尽くしたいと思います。



お三方のお話を受け、一柳が若い音楽家たちとともに本企画への期待を話しました。

一柳慧:

新型コロナウイルス感染症の影響によって世界中で音楽活動が制限されてしまっているなか、本企画で鈴木さん、本條さん、成田さんをはじめとする素晴らしい音楽家のみなさんが、これからの音楽の在り方を示してくれることと期待しています。

今の若いみなさんは、まさにクールで、人の話をよく聞いていらっしゃると思います。音楽についても、実によく聴いて、演奏しているという印象が強いですね。今の社会状況は新型コロナウイルスによって、世界各地で分断や衝突が加速しているように思うのですが、今お話をされた若い3人の音楽家のお話を伺っていると、そういうこととは違った新しい音楽への考え方や、音楽に向き合う姿勢を感じ、希望が湧いてきます。



3月20日「エクストリームLOVE」に出演される「ブルーオーロラ サクソフォン・カルテット」の平野公崇さん、ピアニストの河合拓始さんからはメッセージ（動画）をいただきました。

平野公崇(ブルーオーロラ サクソフォン・カルテット):

武満徹「一柳慧のためのブルーオーロラ」を演奏します。グループ名もこの作品にちなんでいます。この作品には通常の楽譜が存在せず、3つの図形と1枚の指示書があるのみで、今回はメンバー4人の即興性にゆだねたいと思っています。フレッシュなアイデアをいかすために、当日はそれまでに積み重ねた過去のアイデアをいかにすべて忘れ去るかにすべてがかかっています。

河合拓始:

7つの「ピアノ音楽」を演奏します。この作品は一柳さんが米国でジョン・ケージと行動を共にしていた1959-61年に作曲されました。図形楽譜や指示によって作られたもので、演奏家に任されている裁量が大きく、取り組みがいのある刺激的な作品です。2012年に東京で行った演奏会が7曲すべてを通して演奏する史上初の機会です、今回は2度目となります。前回とはまた趣の違うものになるはずですのでぜひお聴きください。

このほか、音楽堂では「エレクトロニクス卓球台」が登場することが紹介されました。2009年に県民ホールギャラリーや金沢21世紀美術館に登場したもので約12年ぶりにさらに進化して披露されるそうです。それにちなみ、それぞれの卓球経験を語る和やかな場面も。

一柳:わたしにとって卓球は「One of them」です。（「愛すべきものひとつ」という意味で）

成田:前回やったのは中学時代ですね。ヴァイオリンを演奏するうえで球技は危ないですが、卓球なら安全に楽しめるかもしれません。

本條:私の父は卓球で全国大会に出場するほどの腕前でしたが、私はあまり上手ではなくて。私の尊敬する三味線のパイオニア・高田和子先生が一柳先生とライバルでまわりのみなさんが驚くほどの戦いを繰り広げられたと聞いたことがあります。

鈴木:球技全般得意なのですが、卓球だけは苦手で、ぜひ一柳先生にお手合わせいただきたいです。

続いて、現在作成中のヴィジュアルイメージが公開されました。一柳が卓球のラケットを手にするイラストは日本を代表するイラストレーター、松下進さんによるもので、近日完成予定です。

最後に、今回の公演で設けられた「一柳シート」（学生0円、一柳が学生のみなさまをご招待）が紹介されました。このアイデアを発案した鈴木優人さんは「一柳作品を聴いたことのない若い方に、ぜひ一柳作品に触れていただきたい」と語っています。

この他、県民ホールギャラリーでは「大山エンリコイサム展 夜光雲」の開催にあわせ、1月17日に「チェンバロと笙による『音幻』」を開催します。新進気鋭の流尾真衣さん（チェンバロ）と三浦礼美さん（笙）が一柳の「ミラーージュ」などを演奏予定です。現代美術のインスタレーションと音楽が交錯し、これまで潜んでいた視覚的感覚、聴覚的感覚が交じり合うことで表出される『音幻』をぜひご体験ください。

以上、「Toshi 伝説」記者懇談会レポートをお届けしました。